

西澤一俊：海藻の生産と利用の国際講習会

Kazutosi NISIZAWA: Workshop on seaweed production and utilization at Qingdao

1987年5月25日から6月15日の間中国青島で目下の主要海藻の養殖と利用に関するFAO（世界食糧農業機関）主催の講習会が行われた。目的は、テングサ属に代わる寒天原藻で、養殖が比較的容易なオゴノリ属とか、カラギーナン原藻として温い海域で養殖できるキリンサイ属などを世界の各海域で養殖増産し、ヒドロコロイド生産を盛んにすることや、さらにその製造や性質に関する知見の習得および食料としての海藻の展望などの広範な内容を、これらの諸点では経験の浅い、その意味での後進国に関心をもって貰い、また知識や技術を学んで貰ったりすることであった。しかし、実際のところは、中国でこれから大規模に養殖しようとしているオゴノリ属やキリンサイ属のここ数年間の実績を中心にして講演が組み立てられていた感もあった。

FAO から招集を受けて参加した国は、アルゼンチン、チリー、ブラジル、クック島、ミクロネシア、韓国、フィリピン、モザンビーク、パラオ共和国、セントルシア、フィジー、インド、タイ国、タンザニア、キリバス、北朝鮮、スペインなどの諸国で、各国から1～2名の出席があった。

講師陣は、アメリカ（Doty 教授とケルコ株式会社の McPeak 氏）、オーストラリア（McHugh 教授）、カナダ（FMC 国際 AG の Neish 氏および Pringle 教授）、チリー（Santelices 教授）、イギリス（Stephen 研究員）、日本（西澤）、中国（曾呈奄、呉 超文、紀 明候、費 修綆）である。Pringle 教授は養殖の生態学を、Doty 教授は主要養殖海藻の分類とその養殖の現況を、Neish 氏はフィリピン海域のキリンサイ属の養殖の現況と養殖上の重要事項などを、McPeak 氏は、ケルコ社の実績を中心にマクロキスチスの生態特にその海底森林と根を食べるウニなどの生態と防除薬および収穫船による大量収穫の実況などを、McHugh 教授は世界のアルギン酸の生産状況やかつてタスマニアにあったアルギン酸工場の方式を主体にその製造工程や性状などを、筆者は日本を主にした世界の海藻食品の製造や生産状況、成分上の特質などを、曾教授は中国のコンブ属、キリンサイ属、オゴノリ属の養殖に関する概況を、呉教授は実験室および主に海南島におけるキリンサイ属の養殖の現況を、紀教授はアルギン酸、カラギーナン、寒天などの化学的性状や中国における製造工程の概要を、そして費教授はオゴノリ属の実験室スケールの培養から胶州湾や海南島およびその附近の海における養殖状況を、それぞれ講演し、大体1人の平均分担は1.5日であった。

中国各地の、諸大学の教授や研究所からの若い研究者も含めた中国人が、約20名ほど出席していた。講演や質疑応答は英語であったが、必ず中国語で、翻訳された。日本人は筆者だけであり、言葉の点で非常に苦労したが、中国の教授の中には日本語の達者の人がおり、筆者の理解し兼ねたことなどは、英語→中国語→日本語という道筋で何んとか助かった。

講習会の中頃、全員で近くにある巖だらけの山で有名な嶗山へ一日旅行をしたり、そのほかに、胶州湾周辺のアルギン酸や寒天製造工場を見学したり、テングサやオゴノリ、ポルフィラなどの養殖場やコンブの養殖場を船で見学したりした。

講習会の最後の4日間は、全員で広州経由で海南島におけるキリンサイ属やオゴノリ属の養殖現場を見学したり、オゴノリ寒天製造所なども見学した後解散した。

講習会の初日と講演終了日の翌日は質疑応答の時間が設けられ、各国からの出席者がそれぞれの国の養殖状況または将来計画などを披露した。アフリカの諸国や大太平洋の小さな島でも、そこに適した種類のキリンサイ属やオゴノリ属の養殖を希望しており、チリーを始めとしたアルゼンチン、ブラジルなどの南米諸国ではすでに実験室ではそれらの養殖の基礎研究をしているとのことであった。

使用した教科書は、1). Case studies of seven commercial seaweed resources (M.S.Doty, J.F. Caddy, B. Santelices 著)と、2). Production and utilization of products from commercial seaweeds (D.McHugh, N. Stanley, K.Nisizawa 著)で、いずれも FAO から出したものである。

（日大農獣医・水産学科、東京教育大学名誉教授）